

欧州視察報告書

～イギリス・イタリア～

沖縄経済同友会

2024年10月

主催：国際委員会

目次

I.視察団名簿.....	2
II.視察日程表《2024年10月27日（日）～11月3日（日）》.....	3
III.視察総括.....	5
垣花 秀毅 国際委員会委員長（㈱おきぎん経済研究所 代表取締役社長）	
IV.HATCH エンタープライズ社訪問.....	10
安慶名 健（㈱りゅうせき建設 代表取締役社長）	
V.IoD（英国経営者協会）への表敬訪問ならびに意見交換会.....	14
久貝 博康（沖縄プラント工業㈱ 代表取締役社長）	
VI.インペリアル・カレッジ・ロンドン視察.....	18
中島 秀昭（三菱商事㈱ 那覇支店 支店長）	
VII.ロンドン自然史博物館視察.....	21
小林 文彦（川崎重工業㈱沖縄支社 上席主幹）	
VIII.在英国日本国大使館による経済ブリーフィングならびに意見交換会.....	25
多嘉良 尚子（㈱琉球銀行 人事部長）	
IX.大英博物館視察.....	28
仲田 一郎（ヤシマ工業㈱ 代表取締役）	
X.個人用高速輸送システム Pod 体験乗車（ヒースロー空港）.....	31
東川平 靖（那覇空港ビルディング㈱ 専務取締役）	
XI.JETRO ミラノ事務所訪問.....	35
仲里 武思（沖電開発㈱ 代表取締役社長）	
XII.アルベルゴ・ディフーズ（ゴルフエレンツォ村）ならびにワイナリー視察.....	37
河野辺 朋広（全日本空輸㈱ 沖縄支店長）	
XIII.コモ湖視察.....	42
船場 誠吾（㈱近畿日本ツーリスト沖縄 代表取締役社長）	
XIV.在ミラノ総領事によるブリーフィングならびに意見交換会.....	45
安慶田 晃大（沖縄電力㈱ 法人営業部長）	

I. 視察団名簿

No	当会役職	氏名	会社名	役職
1	代表幹事	ふちべ みき 淵辺 美紀	株式会社ジェイシーシー	代表取締役会長
2	代表幹事	やましろ まさやす 山城 正保	株式会社沖縄銀行	代表取締役頭取
3	副代表幹事	とうめ ほるお 當銘 春夫	株式会社りゅうせき	代表取締役会長
4	副代表幹事	しまぶくろ けん 島袋 健	株式会社琉球銀行	代表取締役頭取
5	副代表幹事	まえだ たかこ 前田 貴子	株式会社ゆがふホールディングス	代表取締役社長
6	国際委員長	かきはな ひでき 垣花 秀毅	株式会社おきぎん経済研究所	代表取締役社長
7	未来創造委員長	あげな けん 安慶名 健	株式会社りゅうせき建設	代表取締役社長
8	環境・エネルギー委員長	くがい ひろやす 久貝 博康	沖縄プラント工業株式会社	代表取締役社長
9	組織拡大・交流委員長	こばやし ふみひこ 小林 文彦	川崎重工業株式会社 沖縄支社	上席主幹
10	常任幹事	かわのべ ともひろ 河野辺 朋広	全日本空輸株式会社	沖縄支店長
11	常任幹事	なかざと たけし 仲里 武思	沖電開発株式会社	代表取締役社長
12	常任幹事	なかじま ひであき 中島 秀昭	三菱商事株式会社 那覇支店	支店長
13	常任幹事	なかだ いちろう 仲田 一郎	ヤシマ工業株式会社	代表取締役
14	常任幹事	ひがしかわひら やすし 東川平 靖	那覇空港ビルディング株式会社	専務取締役
15	正会員	ふなば せいご 船場 誠吾	株式会社近畿日本ツーリスト沖縄	代表取締役社長
16	準会員	たから なおこ 多嘉良 尚子	株式会社琉球銀行	人事部長
17	会員企業	あげだ あきひろ 安慶田 晃大	沖縄電力株式会社	法人営業部長
18	事務局長	しまだ たかあき 島田 尚昭	沖縄経済同友会	事務局長
19	事務局次長	うえち りゅうた 上地 龍太	沖縄経済同友会	事務局次長

II. 視察日程表

月日	都 市	現地時間	交通機関	行 程	食事
10/27 (日)	那覇空港 発 那覇空港 着	18:10 20:30	NH472	那覇空港国内線ターミナル3階集合 空路にて羽田空港へ 羽田着後、宿泊ホテルへ 【羽田泊】	
10/28 (月)	羽田空港 発 ロンドン・ヒースロー空港 着	08:00 10:00 15:40 17:00 18:00 20:30	NH211 専用車	チェックイン(搭乗・出国手続き) 空路にてロンドン・ヒースロー空港へ ※所要時間:14時間45分 入国後、ロンドン市内へ 市内レストランにて夕食 宿泊ホテル着 【ロンドン泊】	朝 機 夕
10/29 (火)	ロンドン滞在	08:00 09:00～ 10:30 11:00～ 12:30 12:45 14:30～ 16:30 18:30～ 20:30 21:00	専用車	ホテル発 ◎HATCHエンタープライズ社訪問 ～社会的弱者への企業支援視察～ ◎IoD(英国経営者協会)訪問 ～日英のビジネス連携について意見交換～ 市内レストランにて昼食 ◎インペリアル・カレッジ・ロンドン訪問 ～産学連携による共同研究事例について～ ◎在英国日本国大使館との面談 ～経済ブリーフィングならびに意見交換～ 宿泊ホテル着 【ロンドン泊】	朝 昼 夕
10/30 (水)	ロンドン滞在 ロンドン・ヒースロー空港 発 経由/フランクフルト空港 着 経由/フランクフルト空港 発 ミラノ・マルペンサ空港 着	09:00 10:00～ 11:30 12:30 13:30 15:30 18:05 21:00 22:15 23:00 24:00	専用車 LH909 EN8816 専用車	ホテル発 ◎大英博物館視察 ロンドン・ヒースロー空港へ ◎個人用高速輸送システムPOD体験乗車 チェックイン(搭乗・出国手続き) 空路にてフランクフルト空港へ ※所要時間:1時間35分 空路にてミラノ・マルペンサ空港へ ※所要時間:1時間15分 入国後、ミラノ市内へ 宿泊ホテル着 【ミラノ泊】	朝 昼 夕
10/31 (木)	ミラノ滞在 ゴルフフェレンツォ村	09:00 09:30～ 11:00 12:30～ 15:15 15:30～ 17:30 19:00 21:30	専用車	ホテル発 ◎ジェットロ・ミラノ事務所 ～最新経済動向ブリーフィングならびに意見交換～ ◎アルベルゴ・ディフェーズ視察(ゴルフフェレンツォ村) ～イタリアの街づくり成功事例視察～ ◎ワイナリー視察(カマトローニ家) ～イタリアワインに見るブランディング戦略視察～ 市内レストランにて夕食 宿泊ホテル着 【ミラノ泊】	朝 昼 夕

11/1 (金)	ミラノ滞在	08:30 終日 18:00～ 19:00 19:00 21:30	専用車	ホテル発 ◎コモ湖視察 ～高付加価値な観光地モデルケース視察～ ◎ミラノ総領事によるブリーフィング ～イタリア(ミラノ)の観光の現状やブランド戦略等～ 市内レストランにて昼食 宿泊ホテル着 【ミラノ泊】	朝 昼 夕
11/2 (土)	ミラノ・マルペンサ空港 発 經由/フランクフルト空港 着 經由/フランクフルト空港 発	09:00 午前 12:00 午後 16:10 18:20 19:45 20:45	専用車 EN8813 NH224	ホテル発 ◎ミラノ市内視察 市内レストランにて昼食 ◎ミラノ市内視察 マルペンサ空港着、チェックイン(搭乗・出国続き) 空路にてフランクフルト空港へ ※所要時間:1時間20分 空路にて羽田空港へ ※所要時間:13時間15分	朝 昼 機
11/3 (日)	羽田空港 着 羽田空港 発 那覇空港 着	17:55 20:15 23:00	NH479	乗り継ぎ便にて那覇へ 到着後、解散	機

III. 視察総括

【報告者：垣花 秀毅（国際委員長：株式会社おきぎん経済研究所）】

沖縄経済同友会視察団 19 名は 2024 年 10 月 27 日（日）～11 月 3 日（日）の 7 泊 8 日の日程で欧州（イギリス・イタリア）視察を実施した。国際委員会及び観光委員会、地域・経済活性化委員会の共催とし、下表のとおり現地の経済団体との意見交換や観光に関する先進事例等の視察を行った。

訪問地	視察内容
ロンドン	<ul style="list-style-type: none">・ 社会的弱者の起業支援会社の代表者との意見交換・ 英国経営者協会との意見交換・ インペリアル・カレッジ・ロンドンにて産学官連携の取り組みに関するブリーフィング・ ロンドン自然史博物館・ 在英国日本大使館の特命全権公使よりイギリス経済に関するブリーフィング・ 大英博物館・ POD（個人用高速輸送システム）体験乗車
ミラノ	<ul style="list-style-type: none">・ ジェトロミラノ事務所にてイタリア経済に関するブリーフィング・ アルベルゴディフェューゾ（分散型宿泊施設）およびワイナリーにて地方における観光ブランディングの体験・ コモ湖にて、富裕層向け観光地の取り組みを視察・ 在ミラノ日本国大使館総領事によるミラノ市の経済および観光に関するブリーフィング・ ドゥオーモ（大聖堂）やスカラ座などミラノ市内の歴史的建造物の視察

出発（10/27（日）～28（月））

沖縄から 10/27 に羽田空港へ移動。翌 28 日に東京から参加するメンバーと合流し、午前 10 時に羽田からロンドンのヒースロー空港へ向けて飛び立った。ロシアのウクライナ侵攻の影響でロシア上空を避けて北極航路をとっていることもあり、通常よりも長い約 14 時間のフライトであった。日本とロンドンとは 9 時間の時差があり、到着は現地の 15 時頃（ $10+14-9=15$ ）。ホテルへ向かうバスは渋滞に巻き込まれる。ロンドンではジョンソン首相の時代に自転車専用レーンを整備したことで一部の道路では車線が減少し渋滞が悪化しているという。渋滞問題は沖縄に限ったことではないようである。バスの車窓からウエストミンスター寺院やロンドン塔など歴史的建造物を見ながらホテルへ到着。その後、レストランに移動し夕食を兼ねた結団式を行った。

ロンドン視察 [10/29（火）～30（水）]

最初の視察先は女性や非白人など社会的弱者の起業を支援している HATCH エンタープライズ社である。一般的にベンチャーキャピタルによる投資はビジネスモデルが一定程度確立して事業を拡大する段

階で行われるが、ここではアイデア段階のシードステージからメンターが相談相手となり事業計画やネットワーク作りなどを支援している。このような活動を支えているのが企業からの寄付であるという。

次に英国経営者協会（IoD）との意見交換である。120年にも及ぶ長い歴史を持ち、政治家や王室との強いつながりを持っている経済団体である。「Connect」「Develop」「Effect」という3つの機能を持ち、経営者のネットワークをつなげ、スキルを開発し、政府に影響を与えているという。瀧辺代表より「経済同友会は特に政策提言を重視しており、沖縄経済同友会も沖縄振興に関与していること」を紹介した。



[HATCH エンタープライズ社]



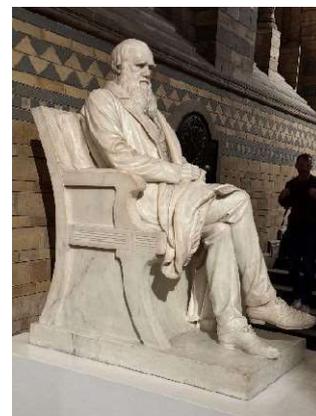
[英国経営者協会（IoD）]

3つ目の訪問先はインペリアル・カレッジ・ロンドン。世界最先端の科学技術を研究している施設である。ここでは、三菱重工業との産学連携でターボチャージャーの開発チームを率いているリカルド教授（スペイン出身）から話を伺った。なぜ企業が資金を出して大学との共同研究を行うのかという質問に対し、「①スキルのある人々のよく投資された設備がある」「②大学なので人材の入れ替わりがあり、フレッシュなアイデアが出てくる」などの見解が示された。沖縄科学技術大学院大学（OIST）においても産学官連携の取り組みが進められており、参考になるものであった。

4つ目は自然史博物館。大規模な施設に大きなクジラの骨格やダーウィンをはじめ多くの研究者が収集した標本が展示されている。沖縄でも日本初の「国立自然史博物館」の誘致活動を進めているが、このような施設が教育や研究の拠点として多くの人々を集めていることが感じられた。



[インペリアル・カレッジ・ロンドン]



[自然史博物館のダーウィン像]

4か所の視察先を巡った一日の締めくくりは在英日本大使館との交流会である。特命全権公使の池上正喜氏よりイギリスの政治経済の状況に関するブリーフィングを受けた後、5～6人ごとのテーブルに分かれて大使館職員と意見交換を行った。



[在英日本国大使館の皆様との記念撮影]

視察4日目の10/30(水)は大英博物館の見学。イギリスが世界帝国であった時代に世界各地から収集した文物が大規模な施設で展示されている。それらの帰属については議論のあるところだが、ギリシャのパルテノン神殿の彫像やエジプトの巨大な石造などには圧倒される。また、入館料が無料とされていることにも驚く。イギリスも財政事情は苦しいと聞かすが、多くの人々に歴史や文化に親しんでもらいたいという政策が継続されているという。

続いて個人用高速輸送システム Pod 体験乗車。ヒースロー空港の交通渋滞の悪化を防止するために2011年に設置され、離れた場所にある大駐車場とターミナルビルを専用道路で結ぶ個人用高速輸送システムである。丸みを帯びた4名乗りの可愛らしい無人の車体に乗込み、エレベーターのようにボタンを押すだけで、行き先まで運んでくれる。満員電車に詰め込まれるのではなくプライベートな空間で座って移動できる場所もよい。沖縄でも例えばジャングリアの開業で交通渋滞が予想されている沖縄本島北部で導入すれば、少し離れた大駐車場から渋滞を避けて送客することが可能になるだろう。現在の日本の法規制では想定されていないと聞かすが、イギリスで十年以上も安全に運行されているのであれば実現可能性は高いと考える。



[大英博物館]



[個人用高速輸送システム Pod]

ミラノ視察 [10/31 (木) ~11/2 (土)]

ロンドンからフランクフルトを経由し、10/30 (水) の深夜 1 時頃にミラノのホテルに到着。10/31 (木) から始まったミラノ視察の最初の訪問先は JETRO ミラノ事務所。三宅所長よりミラノ経済の概要、イタリア三菱商事の古賀社長より現地でのビジネスについてブリーフィングを受けた。日本ではイタリア人についてラテン系のちょいワル親父のイメージが強いが、実際は真面目で生産性が高い。残業をせず時間内に終わらせる能力があるという話が印象的であった。

続いて、ミラノ郊外のゴルフェレンツォ村に向かう。ここではアルベルゴディフーズという分散型宿泊施設を見学。民家を改装した宿泊施設とレストランなどが一体として運営され、宿泊客はそこに住んでいるかのようにその地の人・文化・歴史等に触れながら滞在ができる。続いて近隣のワイナリーを見学。イタリアでは 19 世紀後半まで各地域が都市国家であったため地域ごとの特性が強く、ワインでは土着品種が多い。そのため、イタリア人も季節ごとに異なる地方の旅と食を楽しんでいるという。



[JETRO ミラノ事務所]



[ゴルフェレンツォ村]

ミラノの 2 日目は、コモ湖である。古くから風光明媚で知られ、湖畔には著名人の別荘も多く、貴族の邸宅を改装した高級ホテルも点在する。沖縄も富裕層向けの観光に注力しようとしているが、貴族の邸宅であった長い歴史と美しい庭園については格段のレベルの高さを感じた。



[コモ湖のクルージング]



[ヴィラデステの庭園]

夕方にはミラノ市内に戻り、在ミラノ日本国総領事館の小林総領事によるブリーフィングを受講した。イタリアは英仏独より少し落ちる4番手のイメージを持つ人が多いが工業では長くドイツに次ぐ2位、GDPも世界8位の工業国であるという。特に北イタリアは工業が盛んで、ミラノがあるロンバルディア州は国としてみればEUで8位になるくらいの力がある。富裕層が別荘を持つような景勝地があり、お金に糸目をつけない超富裕層を惹きつけている。例えば、初期からのピアノが100台もあり、各部屋でその時代の曲の演奏を聴いて次の部屋に行くというような体験が出来るというような場所がイタリアにはたくさんある。



【ミラノ総領事の小林氏との記念撮影】

11/2（土）は視察の最終日でミラノ市内を散策した。ドゥオーモ（大聖堂）やスカラ座などの歴史的建造物に隣接して、ディズニーランドのワールドバザールのモデルになったといわれているアーケード街があり、高層ビル群も視界に入る。ミラノの工業製品はデザイン性が高く、ファッションの分野でも自動車産業でも同種の製品よりも高い付加価値を生んでいるが、そのバックボーンである文化を強く感じる街である。



帰路〔11/2（土）～3（日）〕

最終日はミラノ散策を楽しんだ後、フランクフルトを經由して翌日の18時頃に羽田空港に到着した我々は解団式を行った。振り返れば、ロンドン・ミラノという歴史のある街で、朝から晩まで多くの視察先を回り、メンバー同士でも交流を深め、沖縄経済同友会らしい視察であった。

最後に、これほどの充実したスケジュールを可能にした経済同友会事務局と近畿日本ツーリスト様、そして数々のサポートを頂いたANAの皆様感謝を捧げたい。

以上

IV. HATCH エンタープライズ社訪問 ～社会的弱者への企業支援～

【報告者：安慶名 健（㈱りゅうせき建設 代表取締役社長）】

1. 今回の視察にあたって

3日目は、今回、欧州初めての視察先 HATCH エンタープライズを訪問しました。本部は、南ロンドンの庶民的な市場の一角にありました。市場は 400 年続いており野菜からお肉、魚、衣服まで露店で売られている生活感のある市場でした。喜劇王のチャップリンが生まれたのもこの辺りとのことでした。

2020 年の E U 離脱やその後の経済の混乱、直近の総選挙で保守党から 14 年振りに労働党へ政権交代したイギリスにおいて、社会的弱者への企業支援に長年取り組まれている起業支援家のダーク・ビショフ氏を訪ねました。



2. 視察先、講演会の基本データ

団体名：Hatch Enterprise（起業家育成インキュベーター）

設立：2013 年

創設者：Dirk Bischof（ダーク・ビショフ）氏

ドイツ出身。ベルリンの壁崩壊後、失敗の許されないドイツ社会から何度もチャレンジができるイギリスへ渡り多くのプロジェクトに関わった。

専門領域はアントレプレナーシップ・サステイナビリティ・若者の就労支援。

ビショフ氏は日本を愛し、14 回の来日経験があり古武道を習得している。

3. 講演会の内容

冒頭は、ビショフ氏の自己紹介から。父親が金属業をやっていて継いで欲しかったようだが 3 年半ほど働いたが逃げ出してイギリスに来た。過去 20 年のうちに 5 つの事業を始めて HATCH が最終形。30 人の社員と 100 名のメンターがいる。

HATCH はイギリスでは主流でない普段チャンスがない層への起業支援団体である。イギリスにおいて起業の機会は平等ではなく、白人の男性で 30 代のような人ならチャンスはあるがそれ以外はチャンスが少ないのが現状。例えば女性、有色人種、障がいがあると更にチャンスは狭まる。

過去 11 年間で感じたことは才能がある人がいれば適切なチャンスを与えたいということ。

なお、社会的弱者が起業するにあたり、下記3つのビジネスへの障壁がある。

- ① 知識、スキルがなくノウハウがない
- ② ネットワーク（人脈）がないのでメンターやコーチと出会えない
- ③ 助成金や融資などが受けられない

HATCH のプログラムはこの3つに対応している。イギリス、ロンドンには多様性に富んだ土壌でいろいろな人種がいる一方、主流でない有色人種は5%ほどしかビジネスで活躍できていない。やる気がないのではなく、機会が与えられていない。女性に関する背景も同様である。実際にオーナーも少ない。

当社の企業理念は、「背景が恵まれない方を支援すること」であり、信念は「起業家は富をもたらせてくれる存在」ということ。起業家は新しい商品、サービスを作る。その後、彼らは雇用主となり、更に投資家になる。そのこと自体が地域社会にインパクトを与える。彼らと働くことが私の喜びである。

10年前は主流でない層への支援をするのは2社しかなかった。今では、20社から30社ほど存在している。生態系自体が大きくなった。それは誰かが一歩を踏み出したから。2014年に初めての民間企業のパートナーはJPモルガンだった。こちらのパートナーの役割は重要で、メンターやコーチ、会計のサポートコーチングもしてもらっている。我々のモデルとしては民間企業から支援金を受け知識やスキルもいただいて会社を発展させていくことである。



4. HATCH の起業支援プログラムの内容

<第1段階> ローンチパッド（発射台と呼んでいる）

これから起業をする方が対象。ここに問い合わせをして始まる。ビジネスのアイデアを始める人は勢い余って仕事を辞めてから参加したいという人が多いが、それは止めている。まずはアイデアをテストして成功することが見えてから取り組ませている。

<第2段階> インキュベーター（孵化期段階）

既にビジネスを始めて6か月から12か月ほどたった方が対象

<第3段階> アクセラレーター

起業家として1年から3年続けていてよりビジネスを拡大したい方が対象

<第4段階> ベンチャーラボ

特にベンチャーを始めたい、かつ、短期間でビジネスを大きくしたい方が対象

5. HATCH の成功事例について

- A：マイクロプラスチックが環境を汚染しないように掃除をする取り組み。大企業がエンゲージメントを高めるためにこの活動へ参加をして社内の絆を深めるために活用している。
- B：日本のヤマト運輸と契約したラストマイルグリーンデリバリー配達電気自動車の「ハイド」というロゴの自転車が 500 台以上動き始めている。
- C：英国では保険の関係でレントゲンの予約に 1 年待たされることもある。その課題に対し民間の医療機関で安価なレントゲン受診の仕組みを考えた。人命を救う取り組みをしている。

6. 主な質疑応答

Q：スタートアップの最大の寄付はいくらで返済の有無は？

A：ベンチャーラボの助成金は 10,000 ポンドが最大で、返済はない。その上で、1 社から 125,000 ポンドが最大の投資になる。その代わり 7% 出資して株を保有する。それを複数社からもらえる場合がある。HATCH を卒業したら制限はない。

Q：HATCH を知るための広報はどうしているのか？

A：4 人の広報担当がいる。SNS やイベントもやっていて 5,000 人のメーリングリストがありフライヤーを配っていてもいる。この 10 月はイギリスでは黒人の歴史を知ろうという期間。たくさんの機関とイベントを行っている。

Q：現在の課題は何か？

A：イギリスの EU 離脱は大きな出来事であった。業績の影響もありサポートを渋る企業もでてきている。それ以外にも政権交代があり保守党から労働党になった。長年の歪があり財政がよくない。政府からの助成金もカットされた。民間の支援で成り立っている。労働党としては支援したいのかもしれないが財政が厳しい。支援者を探すのが課題である。

Q：ベンチャーの死の谷。3 年で 90% が廃業という時はどういった問題があったのか？

A：スタートアップの失敗は多々あるが、プロダクトとマーケットがフィットしないこと。トライはするがお客様がつかなければ単純に資金が尽きて行き詰まる。それと才能のある人材を取り込めなかったことなど。

Q：20 ある団体の中で比較してどこが違うのか？

A：スタートアップ支援が商品なのでサービスなどはあまり差がない。他との違いは対象者が違う。他は男性が多いが、うちは 80% が女性で多様な背景がある。他の団体はローンチングのみなど限っているがうちは全段階を対応している。

7. 視察を終えての感想

ビショップ氏は、第一印象から明るく気さくな方で、親日家ということもあり和やかな講演をしていただきました。人を惹きつける魅力と情熱があつてこそ、このビジネスが成功しているのだと感じました。

女性、有色人種、障がい者などイギリスにおいて社会的弱者と言われる起業家たちを支援し、しかもその多くは環境問題への取り組みや健康など社会的に良い影響を与える事業となっている。

その意義深い事業を通じて、今後もイギリスの発展につなげていてもらいたいと思いました。私も事業を行う上で、社会にどう良い影響を与えるのか？事業を行う上での視点の大切さを学びました。



V. IoD（英国経営者協会）への表敬訪問、意見交換会

【報告者：久貝 博康（沖縄プラント工業(株) 代表取締役社長）】

視察3日目に、IoD（英国経営者協会）を訪問し、同会トップのジョナサン・ゲルダート博士をはじめ、日本ビジネスグループのメンバーの皆様と同会の組織概要や日英におけるビジネス連携等について意見交換を行った。

《意見交換会概要》

●冒頭挨拶（インドラニル・ナス博士：IoD 日本ビジネスグループフェロー兼会長）

- ・IoD（英国経営者協会）は、経営者の理念、責任ある行動や規範を重んじる協会である。
- ・法的な機関であり、行動規範として責任あるものを推奨している。
- ・経営者の方々が経済活動に貢献できるよう、組織を引っ張っていけるような力をつけて頂くことが我々の目的である。
- ・IoDとしては、英国と日本のビジネス関係での結びつきを広めたいと思っている。沖縄経済同友会の皆様ともアイデア交換しながら関係を強めていく事で、経済成長と社会貢献に繋げていけると思う。

●歓迎挨拶（ジョナサン・ゲルダート博士：IoD 事務局長兼 CEO）

- ・IoDは1903年に創設され、王位勲章をうけており、120年の長い間ビジネス界との繋がりはもちろんのこと、王室や政治家との強い繋がりのもとで歩んできた。
- ・我々の目的、目標としては、これから100年、200年ともっと長く歩んでいきたいと思っている。我々が発言するときは独立機関として発言することを常に心掛けている。
- ・世界中のビジネス界の皆様との繋がり、我々の理念に賛同して頂ける方々と協力をして歩んで行きたい。我々の理念は、信念をもって、責任をもって進めていく事。起業家精神をもって進めていく事である。
- ・我々が目的としているのは、単純に英国経営者協会と沖縄経済同友会との関係を強めることだけではなく、真の目的は、協会に属するメンバーの方々がそれぞれのコネクションを強めて頂くことである。日本のビジネス界に興味を持っている方は沢山いるので、そのような方々も含めて繋がりを強めて頂きたいと思う。
- ・そのために、我々の活動として3つの目的、役割がある。
1つ目はコネクターとしての役割であり、コネクションを提供すること。2つ目は、スキルをもっと深めていただくこと。スキルのディベロッパーであり、スキルの提供者である。経営者として、王室の公認を得ていることを出せる立場でもある。3つ目は、政府との繋がりであり、英国政府や日本政府、皆様やメンバー達との強い繋がりを作れるような恵まれた立場だと思っている。

●沖縄経済同友会からの挨拶とプレゼン（淵辺代表幹事）

- ・日本には、商工会議所、経団連、経済同友会の3つの大きな経済団体がある。沖縄経済同友会は、経済同友会の沖縄地区として機能しており、沖縄の経済発展と政策提言を中心に活動している。
- ・日本の経済同友会は、1946年に設立され、沖縄は戦後米軍の統治下になったため沖縄経済同友会は

遅れて、1983年に設立された。昨年、40周年を迎えたところである。

- ・沖縄は観光業が主要産業であるが、沖縄から飛行機で4時間圏内に20億人のマーケットがあり、このマーケットを獲得するため、空港や港、米軍基地の跡地まで含めて広大なプロジェクト（GW2050プロジェクト）を2050年代の完成を目指して進めているところである。
- ・沖縄には、世界的な研究を行っている沖縄科学技術大学院大学(OIST)がある。
- ・GW2050プロジェクト推進、OISTの活用が沖縄ならびに日本経済を引っ張る取組みであると認識して、私達は一生懸命取り組んでいるところである。
- ・相互のアイデア交換やコラボレーションを通じて、沖縄、日本、英国両国の発展に繋げていきたい。

●IoD 日本ビジネスグループの活動紹介及び意見交換

- ・当協会は、会員制で経営者、取締役クラス方を対象としている。
- ・主な目的は、1つ目が会員の人々に繋がってもらいネットワークの構築してもらう事。2つ目が経営者の方々に様々なトレーニング、学びの機会を与えより良いリーダーになってもらう事。3つ目がそのコミュニティに対する影響で社会への良い影響を与えてもらう事である。
- ・英国全土に支部があり、6つの分野別グループがあり縦軸と横軸になってネットワークを構築している。
- ・会員の方々にリサーチ、教育サービス、例えばビジネスのやり方や税金などのアドバイスなども行っている。会員向けにビジネス相談、トレーニング、メンタリングなどのサービスを提供している。
- ・日本ビジネスグループでは、定期的に日本とイベントを開催している。(去った10月24日に日英シンポジウムを实地)
- ・英国のスタートアップが日本に行ってビジネスチャンスを広げる事が目的である。また、日本のコラボパートナーがイギリスでのビジネスチャンスを得る取り組みも行なっている。
- ・来年7月の大阪万博にグループの方々が行ってビジネスができるよう取り組んでおり、医療ヘルスケア、金融、テクノロジー、再生エネルギー、不動産の5分野で活動を行っている。
- ・東京の経済同友会とは、国際経済の動向などで、現在オンラインで意見交換している。3ヶ月に1回のラウンドテーブル行っており、今回は12月1日にグリーントランスフォーメーション、テクノロジー・トランスフォーメーション関連で開催予定である。
- ・沖縄経済同友会とも今後、年に1回ぐらいでもまずは勉強会というの形でも開催できたらと思う。
- ・イギリスでは製造技術に関しては長い歴史があり、農業技術（アグリテック）では、ドローンやGPSファンディングなどの分野でコーポレーション出来るのではないかと思う。
- ・また、EU ビジネスとして、保険も長い歴史があり、保険業界やイノベーション相談などでも何かできるのではないかと思う。
- ・OISTは大変すばらしい研究をやっているが、それをどうやってスタートアップに繋げていくかが非常に大きな課題である。ある程度の投資が世界から集まれば素晴らしい研究成果をビジネスに展開できると思う。沖縄や日本だけではなかなか難しく是非コラボできたらと思う。

●御礼の挨拶(山城代表幹事)

- ・沖縄は観光中心の産業構造であり、コロナ前は年間約 1,000 万人の観光客(国内約 700 万人、インバウンド約 300 万人)が来ていた。アジアのゲートウェイになる沖縄の地理的優位性を活かしてプロジェクトを検討しているところである。
- ・イギリスのスタートアップ企業（農業技術、再生エネルギー、ヘルスケアなど）を是非沖縄に紹介してもらいたい。
- ・2025 年 6 月に日本にいらっしゃる時は、是非沖縄にも立ち寄ってほしい。今後、英国経営者協会と沖縄経済同友会の連携を進めていきたい。

《所 感》

IoD（英国経営者協会）は、経営者のスキルアップを図る為の教育やビジネスネットワーク構築支援など英国ビジネス界の発展のために、活発に活動していると感じた。王室やイギリス政府との強い繋がりもあり、長年にわたり信頼関係を構築してきたのが見て取れた。

日本をはじめ世界各国と交流を深め、ビジネスを広げており、東京の経済同友会とも定期的に交流をしているとのことであり、今後、沖縄経済同友会としても、OIST との連携や GX など様々な分野で IoD と情報交換、意見交換していくことはとても有益であると感じた。





以上

VI. インペリアル・カレッジ・ロンドン視察

【報告者：中島 秀昭（三菱商事(株) 那覇支店 支店長)】

1. インペリアル・カレッジ・ロンドンとは

今般の面談内容の前にインペリアル・カレッジ・ロンドンについて説明する。インペリアル・カレッジ・ロンドン（英語: Imperial College London、略称: ICL、Imperial）は、イギリス・ロンドンに本部を置く英国屈指の理工系名門大学。世界大学ランキング（総合ランキング）では、QS 世界大学ランキング 2025 で世界第 2 位。THE 世界大学ランキング 2024 で世界第 8 位。欧州ではオックスフォード大学、ケンブリッジ大学を上回り第 1 位。イギリスのエリート大学群「ゴールデン・トライアングル」（英国版アイビーリーグ）の 1 校である。

2. 訪問内容

日 時：2024 年 10 月 29 日 14:30 - 16:30

面談者：Professor Ricardo Martinez-Botas（Department of Mechanical Engineering）

Mr Matchy Ma（Industry Partnerships and Commercialization Executive Imperial Enterprise）
他



オートチャージャーのラボにて

まず、三菱重工と協業しているターボチャージャー¹の labo を視察。訪問した施設は企業との共同研究に使用されるもので設備は充実している。

次に会議室に移動し、大学の概要や三菱重工との産学連携の経緯等の説明を頂く。First contact は 2004 年にさかのぼり、長年かけて信頼関係を構築してきたとの事。

同大学の特徴として、基礎研究のみならず、より実践的な応用研究を重視しており、産業界との連携を強く打ち出している。企業との共同研究に必要な大がかりな研究室や関連設備は多額の投資（訪問した施設は 25 億ポンド）を要したが、国庫からの助成のみならず、産業界や企業、及び Venture Capital 等の funding source を確保しており、十分なリターンを確保できているというコメントがあった。産学連携を進める上で、企業の課題や問題点についてよく議論した上でカスタマイズした連携を進め、必要な resource を投入するとしている。

同大学の 2022/2023 年の performance を示す定量的な実績は、特許申請が 101 件、特許発効は 128 件、スタートアップは 45 社設立等具体的な説明があり、それらの activity の成果として、産業研究の収入は 54 百万ポンド、コンサルタント収入は 24 百万ポンドに上る。

連携する企業は多岐にわたり、日系では三菱重工の他に日立やホンダ、小野薬品等に加え、シェルやインドのタタスチール等グローバルな広がりを見せている。

¹ 三菱重工は乗用車向けターボチャージャーを生産しており、主要市場である欧州で ICL と共同研究を約 20 年にわたり行っている。ターボチャージャーの効率化は自動車の排出 CO₂削減に寄与する。

最後に、ビッグデータを可視化し、来校者に demonstration する施設を視察し、沖縄上空からの写真及びビットコインの取引ログのデータについてのデモを行って頂き、慌ただしい訪問を終えた。



大学のゼミ？



沖縄のデモンストレーション

3. 質疑応答

Q1：連携企業の 63%が国外ということであるが、国外企業との連携において必要なものは？

A1：研究チームが既にインターナショナル（訪問したリカルド教授はスペイン人、他のスタッフも香港、他にマレーシア出身である）である。また、相手側の文化（当方への期待値や打ち合わせの進め方等）を理解する事が重要。その為には、相互訪問等でお互いを良く知ることは不可欠である。

Q2：連携する日系企業に資金以外での期待は何か？

A2：人類に貢献できる興味深い課題を欲している。若手の研究員の興味を引く課題であれば更にありがたい。加えて、現実のビジネスで起こっている課題を持ってきてもらいたい。実際にビジネスをしている人からの課題は大学という狭い社会に生きている研究者にも良い気づきとなる。

Q3:多くの優良企業と連携しているが、その多くは自前の R&D 部門、及び巨額の R&D 費用を持っているにも関わらず、自前での開発では無く、貴校と連携しようとするのか？何が貴校の advantage なのか？

A3：有能な大学の人材、および設備である。自前で設備投資も可能であろうが、維持管理も含めたコストを考えた場合に大学の設備を使うメリットはあると思う。研究アイデアを忠実に設備に反映できる。また、機密情報についても漏れる事は無い。加えて、大学は人材の流動性があるので、新たなアイデアが常に注入される。

【山城代表幹事による総括】

本日の来訪を通じて、欧州で3位内、世界でもトップ10に入る大学であることが良く理解できた。日系企業との協業も推進していることは今回初めて知った。また、大学の方針として社会・人々の生活に貢献する研究を掲げている点も素晴らしいと思う。日本政府ももっと国内の大学を支援すべきと感じた。沖縄には OIST があるが、沖縄経済同友会ではこれから提言をまとめようとしているところである。IPL は 45 のスタートアップを育てたということだが、OIST はまだ実績が無い。大企業との共同研究、また国内のみならず海外企業との共同研究の推進も重要と感じたので提言のヒントとしたい。



研究の疲れにちんすこう



ICL キャンパスにて

4. 感想

今回欧州の名門大学を訪問し、産学連携の状況を視察できたことは貴重な経験となった。ICL は研究を通じた社会への貢献を重んじており、より実業に近い研究を行っていることから、グローバルな産学連携を生み出す土壌があるのだろう。

一方で、産学連携を推進する企業側から見た、大学に期待する役割も聞いてみたいと感じた。私の拙い経験では、メーカーは R&D 部門を社内で抱えており、研究をどう収益化するのかという点は時代によって揺れており（例えば、基礎研究重視か、応用開発重視か）、また個社毎に方針も異なると思う（ただし、いつの時代も課題意識があり、順風満帆という企業はあまり聞いたことがない）。質疑応答で大学側の視点で回答して頂いたが、他にも企業側の視点で考慮すべき factor はあると感じている。

最近、東大の学費値上げが話題となっており、大学の稼ぐ力が脚光を浴びている。ICL の収益源は財政支援に加え、企業他からの共同研究への投資、また業界からの寄付やロイヤリティ収入等多岐にわたっており、もう少し日本の大学の稼ぐ力を高めても良いように感じた。大学はアカデミックな場であり、金儲け等けしからんという批判もあろうかと思うが、稼ぐ力が次の世代に繋がる研究活動を finance すると考えれば、稼ぐ力を支援する雰囲気醸成しても良いのではと感じた。

以上

VII. ロンドン自然史博物館視察

【報告者：小林 文彦（川崎重工業(株)沖縄支社 上席主幹）】

【視察目的】

現在沖縄県では「新・沖縄 21 世紀ビジョン基本計画」において、国立沖縄自然史博物館の設置促進に努めており、(一社) 沖縄自然史博物館設立準備委員会と連携して誘致活動に取り組んでいる。

今回の視察は世界的にも有名な同館の視察を行い、自然史博物館の規模や展示内容だけでなく、来場者の反応などを実地で見聞することで、今後の誘致活動への意識向上を図ることが目的である。

【施設概要】

ロンドン自然史博物館（英: Natural History Museum）はサウス・ケンジントンにある博物館。大英自然史博物館、英国自然史博物館などとも呼ばれ、自然史系博物館としてはイギリス最大であるのみならず、世界でもトップクラスである。

同館には 8,000 万点以上もの収蔵品からなる生命科学・地球科学コレクションの収蔵があり、ジェームズ・クックのエンデバー号に同乗したジョゼフ・バンクスが収集した標本、チャレンジャー号探検航海によって収集された標本、スコット探検隊による南極大陸からの標本、博物館の企画によるタンガニーカへの恐竜発掘遠征で得られた標本など海外からの貴重かつ大量の標本を所蔵し、その質と量は世界でも有数である。

コレクションの分野としては動物学・昆虫学・古生物学・植物学・鉱物学の 5 つに大別される。

- ・動物標本 - 6,300 万点（内、昆虫標本が 3,400 万点）
- ・化石標本 - 700 万点
- ・植物標本 - 600 万点
- ・岩石・鉱物標本 - 50 万点以上
- ・隕石 - 5,000 点

標本以外にも自然科学関係の蔵書は 100 万冊を超え、イギリス国内最大の蔵書量を誇る。

また、特筆すべき点として、50 万点を超える絵画コレクションがある。これは並の美術館を凌駕する数であり、イギリス国内でこれを超える収蔵数の絵画コレクションを持つのは、大英博物館とヴィクトリア&アルバート博物館の 2 館のみである。

【視察報告】

当日は前行程（インペリアル・カレッジ・ロンドン）の視察が延びたこともあり、同館の視察時間は閉館までのわずか 45 分間と非常に短い視察となった。さらに、当日はハーフタームと呼ばれる学期の中休み期間で、イギリス全土の学校が 1~2 週間の連休中であるとのこと。そのせいか我々のような海外からの観光客をはじめ、国内からの家族連れのみならず、来場者は人で溢れかえっていた。

今回はロンドン在住の日本人ガイドの案内で、我々は文字通り「駆け足」で広い館内を巡った。東門を入るとすぐに首長竜の骨格標本が我々を出迎える、ライトアップされて神秘的ですらある。さらに進むと、ようやく博物館が見えてくる。ネオゴシック様式の建物は美しさと迫力を兼ね備えており、博物館自体が芸術作品のようだ。



いよいよ館内に入る。入場料は無料なのでチケットブースはない。館内随所に募金箱が置かれているだけだ。2001年以降、イギリス政府は国立の博物館・美術館の常設展をすべて入場無料にしたそうだ。この背景には「すべての人が等しく文化に触れられるように」という素晴らしいポリシーがある。

正面のエントランスホールにはシロナガスクジラ(Hope)の骨格標本が吊るされている。壮大にして美麗、これから始まる館内見学への期待感が高まる。

その後はガイドに導かれるまま、グリーンゾーンの魚類と鳥類の化石・剥製を見学したが、驚かされたのはその展示品の多さであった。しかし、時間のない我々は早歩きで流し見するしかない。



そして、ブルーゾーンの恐竜コレクションへ。多種多様な恐竜の骨格標本やまるで生きているように動く T-Rex のドロイドもあり、子供たちに大人気だった。ここで驚いたのは展示物の中には触ってもいい物もあり、自分の手でその触感を確かめられる面白さがあった。



最後にレッドゾーンの鉱物コレクションへ。入り口にはブラジルで採掘された 9,381 カラットのトパーズが置かれている。美しく、しかも大きい。女性ならずとも見とれてしまう。この他にもたくさんの鉱物が広大なスペースに整然と展示されている。ここでもその展示品の数に圧倒される。



ここでタイムアップ。閉館時間が近づき、残念ながらここで視察を切り上げざるを得ない。我々はミュージアムショップも流し見して泣く泣く博物館を後にした。

【まとめ】

当初の予想通り、わずか 45 分間では駆け足でも館内の半分も見ることができなかった。やはり海外の博物館・美術館巡りは半日・一日という単位で時間を取らないと満足のいく見学はできないものだ。

とはいえ、今回の視察で実感したのは（自然史）博物館にとって重要なのはもちろん収蔵品の数であろうが、それを分野別（来場者の興味・関心ごと）にどう整理し、いかに面白く展示するかが最も重要なことではないかと感じた。「鉱物コレクション」と「恐竜コレクション」の展示方法の違いは、如実にその来場者数に表れていた。「博物館＝古いものを展示している場所」という固定観念を捨て、「博物館も室内

エンターテインメントの一つ」]として考え、いかに来場者を魅了する展示をするかを考えなければ集客（特にリピート客）は望めないという実感に至った。

将来、沖縄県に国立自然史博物館ができるのであれば、エンターテインメント要素たっぷりの明るくて楽しめる博物館になることを望みつつ、これからも経済同友会として全面的に誘致活動を応援したいと思った次第である。

以 上

VIII. 在英国日本国大使館による経済ブリーフィングならびに意見交換会

【報告者：多嘉良 尚子（琉球銀行 人事部部長）】

私たち沖縄経済同友会視察団（瀧辺美紀代表幹事及び山城正保代表幹事他 18 名）は 2024 年 10 月 27 日から 11 月 3 日までの 6 泊 8 日で（イギリス・イタリア）欧州視察を行いました。その中で、3 日目にあたる 10 月 29 日に「在英国日本国大使館による経済ブリーフィングならびに意見交換」を行いました。なお、我々が訪問させていただいた期間が、大使交代の時期と重なっていたため、大使に代わって池上特命全権公使をはじめ、各分野の公使や参事官にご対応をいただきました。

まずはじめに、大使館参加者の皆様と名刺交換をさせていただき、その後池上特命全権公使よりご挨拶ならびにイギリスに関するブリーフィングを行っていただきました。さらに、4 テーブルに分かれて、大使館参加者との意見交換もさせていただきました。

【在英国日本国大使館からの参加者】

- ・池上 正喜 氏 - 特命全権公使（外務省）
- ・川上 恭一郎 氏 - 経済公使（外務省）
- ・松田 康宏 氏 - 財務公使（財務省）
- ・中澤 純 氏 - 参事官（国土交通省）
- ・氷熊 光太郎 氏 - 参事官（農林水産省）
- ・大西 絵里子 氏 - 経済班専門調査員

【池上特命全権公使によるご挨拶・経済ブリーフィング要約】

・沖縄の皆様におかれては外務省沖縄事務所、大使館とも非常にお世話になっている。本日は各テーブルにイギリス経済や生活についてしっかり説明できるメンバーがいるので、ブリーフィングの後に更に詳しい内容をお聞きいただければと思う。

・イギリスの特徴について、伝統と格式を重んじる国である。

・フランスやロシアなどは革命により王室自体が途切れてしまい、国の再建を含めて再構築した歴史があり古い伝統が無くなってしまっている部分があるが、イギリスは中世の歴史やシステムが残っているところが多くある。例えば、人を呼ぶときには公爵 duke・侯爵 Marquis・伯爵 Earl・子爵 Viscount・男爵 Baron といった英国貴族の階級がある。現在でもミスターやミセスなどではなく、いくつもの階級から選ぶこととなっている。その伝統が残っていることの代表例としてクラブがある。

ジェントルマンクラブは、昔の閉鎖的な仲間で開催するクラブなど数多くある。例えば自動車愛好クラブ、オリエンタルクラブ、いろんなクラブが実在している。過去において女性は参加できなかったが、現在は男性の同伴者として女性が参加できる場合や女性の参加者を認めているクラブもある。

・明日の 10 月 30 日はイギリスにとって大事な日で、今年 7 月に労働党が 14 年ぶりの政権交代を果たしたことを受け、財政の赤字部分を解消するためにはどうすべきか、財政演説で新しい方針を出す日となっている。労働党は、前政権が財政に大きな穴をあけて去ったとし、その財政不足 224 億ポンド（日本円にして 4 兆 3 千億円程度）の穴を埋めることが自分たちの仕事だと主張しており、その増税内容が注目されている。

・日本の物価も高い状況となっているが、イギリスにおいても物価が高くなっている。東京と比較しても2倍から3倍程度高い実感がある。またロシアの影響で更にレートにおいても高くなっている状態となっている。

【淵辺代表からの御礼挨拶（一部抜粋）】

池上公使様をはじめ大使館の皆様には、異動の慌ただしい最中にもかかわらず、当会のためにお時間をつくっていただきまして有難うございます。

沖縄は特別に外務省特命全権大使がおりまして、現在は宮川大使となっております。歴代の大使は沖縄経済同友会の特別会員としまして一緒に活動して頂いております。特に沖縄には米軍基地があるということでご苦勞もあると感じております。そのような状況下でも沖縄のために様々なご支援をいただきありがとうございます。また、私ども沖縄経済同友会はミッションとして沖縄の政策提言を行っており、昨年度は“有事の際の「事業継続」と「従業員避難」の提言書”を作成し、国や県へ提出いたしました。

本日はイギリスの歴史や現状、そして未来についてお話をお聞きできたと思います。公使および職員の方が各テーブルに分かれて、イギリスの経済、物価、欧州の歴史、また沖縄の状況や歴史について意見交換ができました。私のテーブルでは当会の有事に関する提言の内容や中澤様が赴任していました鹿児島のお話など興味深いお話が聞けました。

最後に正副代表幹事との記念撮影ならびに全員での記念撮影をし、会は終了となりました。



【補 足】

◀10月31日の各局ニュース参考 NHK WEB▶

英国労働党政権、初の予算案日本円で約8兆円増税、過去最大規模。

イギリスで14年振りの政権交代を果たした労働党政権が初の予算案を発表。財政再建に向けて富裕層などへの課税を過去最大規模で強化する。

リーブス財務相は「働く人たちのための予算」と強調し財政再建に向けて

▽私立学校に日本の消費税にあたる付加価値税を新たに課すなど企業や裕福層への課税によって400億ポンド、日本円でおおよそ8兆円の増税に踏み切ると明らかにした。

「難しい決断だったが、前の保守党政権が空けた財政の穴を埋めなければいけない。」と理解を求めた。

▽最低賃金を時給2400円余りに引き上げるとともに、国民保険サービスや国防費への支出を増やすとも

強調した。

▽スターマー政権は、議会での圧倒的多数を背景に痛みを伴う予算案を断行した形ですが野党は増税しないとしていた選挙公約を破るものだと批判している。

【在英国日本国大使館に関する知識】

日本の「大使館」が最初に設置されたのが英国でした。

1905年（明治38年）12月2日に在イギリス公使館が昇格して大使館となったのが最初です。ちなみに初代駐英大使に任命されたのは林薫（はやしただす）でした。

1890年代、日本政府内部では各国に置いている公使館を大使館に昇格すべきだとの意見がしばしば示されました。このような意見は、日本の要望を列国が受け入れるかが不透明であり先送りされましたが、北清事変（1900年）、日露戦争（1904年～1905年）を経て、日本の実力が徐々に各国に認められるようになり、日露講和会議の直後には、イギリスとアメリカの両国より、日本と大使交換をおこなう準備があるとの意向が伝えられました。日本政府はこの提案に応じて、まずイギリスとの間で大使交換が実現し、在英公使館が「大使館」に昇格しました。林薫が駐英大使となった直後の1906年（明治39年）1月には、アメリカ、ドイツ、フランスでも公使館が大使館に昇格しました。



IX. 大英博物館視察

【報告者：仲田 一郎（ヤシマ工業(株) 代表取締役）】

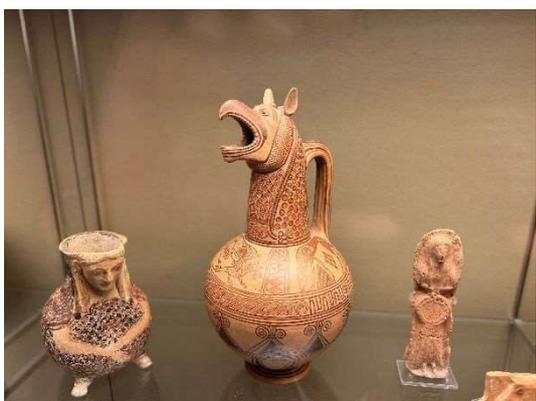
1. 大英博物館について

大英博物館は、ロンドンにある世界最大級の博物館で1753年に設立。その目的は、世界中の文化財や歴史的資料を収集・保存し、学術研究と一般公開を通じて人々に文化や歴史を伝える事を目的とし、その展示物は800万点以上に及び、古代エジプト、ギリシャ・ローマ、アジア、中東、ヨーロッパなどから集められた文明の幅広いコレクションを誇るとのこと。

大英帝国時代に広く収集された約800万点の常設コレクションは、現存するものの中で最大かつ最も包括的なものであり、人類の文化の始まりから現在までを記録しているそうだ。

大英博物館の収蔵品は多くが個人の収集家の寄贈によるもので、創設以来、1970年代の3か月間を除き、入場料が無料というのには驚きである。博物館としての収入の大半は政府からの助成金ということで、それ以外には非営利事業・営利事業の収入、企業・個人・財団等からの寄付があるということだ。

2. 見学時に撮影した収蔵品の写真（一部）



3. 視察を終えての感想

我々一行は開館時間の一時間前に到着して、開館前に特別なツアーとして入館することができた。今回は滞在時間が限られていることもあり、予め見学するコース・内容を決めて館内を巡ることとなったが、代表的な収蔵品であるロゼッタ・ストーンをゆっくりと見学できたのは大変感慨深いものがあった。また、パルテノン神殿の彫刻、古代エジプトのミイラなども見ることもでき、そのスケールと保存状態の良さは目を見張るものがあった。何よりも、人類の歴史や文化の多様性を知る上で非常に重要であり、考えさせられるものがあった。これらのコレクションは、生涯のうちにぜひ一度は見ることをお勧めしたい。

視察行程の都合上、我々に与えられたのは一時間のみであり、その中ではとても全てを見ることは出来ず、収蔵品の多さと博物館のスケールの大きさを実感した。一方で、収蔵品については、その収集方法が現在の視点からすると適切だったのかは論争になっているようで、産出した国々へ返還を求める声もあるということだった。

大英博物館は英国人も外国人も無料で入場することができるため、開館時間になると実に多くの人々が走って入館し混雑と混乱の様相となったが、我々はそのタイミングで名残惜しくも退館した。いつの日か数日をかけて再度チャレンジをしたいと思った次第である。

不思議なのはあの頃「日通」がいたのかと思えることだ。あの規模の収集品を破損することもなく？船便でどのように移送したのか、とても興味が沸いた。

以上



X. 個人用高速輸送システム Pod 体験乗車（ヒースロー空港）

【報告者：東川平 靖（那覇空港ビルディング(株) 専務取締役）】

【Heathrow Pod(個人用電動輸送システム)】 空港で運用する電動輸送車システム

1. 視察概要

- (1) 日 時：10月30日 11時半 ～ 12時頃
- (2) 目 的：ラストマイル用（空港ターミナル～場外駐車場）の個人乗車自動移動システム体験
- (3) ガイド：Ms ICHIKO KOMESU（ロンドン情報や旅程案内等）

2. 特徴と概要（Heathrow Pod）

- (1) 陸上複数地点間の移動用手段として少人数で利用可能な輸送システムは Personal Rapid Transit（個人用高速輸送システム）と言われ PRT と略されている。
- (2) ロンドンのヒースロー空港では、ターミナル5とビジネス駐車場エリアを結ぶ区間で運行されているパーソナル・ラピッド・トランジット（PRT）システムとしては Heathrow Pod（ヒースローポッド/小型自動運転電動車両）と称されている。
- (3) Heathrow Pod は 2011 年に運行開始されており、その概要は以下の通りである。
 - 運行距離：約 3.8 km、時速約：40 km/h、所要時間：約 5～6 分で短距離ながら効率よく移動可能。
 - 収容人数：各 POD は 4 人まで乗車可能（最大乗車人数 5 人）
 - 環境配慮：電動車両であるため、二酸化炭素排出を削減。リチウムバッテリーを使用しており、エネルギー効率も高い。
 - 無人運転：自動運転技術が採用されており、定められた経路（二車線）を無人で走行。利用者はパークの POD 側のデジタルタッチスクリーンを使用して、行き先の指示を行うだけで簡単に操作し利用できる。乗車時 3 つのボタン（クローズ・スタート・オープン）を押下し音声案内にて操作走行する。
 - カメラ管理（監視）：安全配慮のため CCTV カメラによって様々な角度から監視と録画がされ、トラブルが起こった場合でも車内ボタンを押すことで有人のサポートセンターにつながる仕組みとなっている。
 - バリアフリー設計：車椅子に乗っている人やベビーカーを押している人でも簡単に乗降可能。
- (4) ヒースローPod の効果や評価等
 - 駐車場～ターミナル5間のアクセスがよりスムーズになり、混雑緩和や移動時間の短縮に貢献している。利用者から高い満足度も高いようだ。待ち時間も少なく空港内の混雑やバス利用の需要を軽減する効果もある。（利便性向上効果）
 - 電動車両ということで二酸化炭素を排出しないため、環境への負荷が少なく、空港のサステナビリティ向上に寄与する。（環境負荷の低減効果）
 - PRT システムは通常のバスやトラムよりも柔軟で混雑が少なく、利用者の移動効率が向上し、専用レーンでの無人運行によりヒューマンエラーが減少、運行の安全性も高い。（交通の効率化）

- 耐火シートも快適でガラス窓からの眺めもよく、空港周辺の景色を楽しみながら、ゆっくりとした速度で移動する感覚が心地よい。電動かつゴムタイヤのため走行音がほとんどなく、騒がしい空港内から少し離れた静かな空間で移動できる。(移動中の快適さと景観)
- 一方、空港内の限られた範囲でのみの運用なので、空港全体や周辺エリアへのアクセス(他の二次交通機関)には対応しておらず、他の駐車場やターミナル1・2・3との移動は地下鉄やバス等が必要なため、Podだけで空港全体の交通をカバーできていない。(運用エリアの限定)
- 各Pod車両は4人しか乗車できないため、多くの人が利用する時間帯で複数の利用者が集中すると待ち時間が発生する可能性がある。(収容人数の制限)

3. 乗車体験(4人乗車)

(1) ターミナル駅(地下) ⇒ Podターミナル駅(地上)へ移動

↳ 約3分程度(エレベーター・エスカレーター)

(2) Podターミナル駅 ⇒ 駐車場駅(空港滑走路や航空機の離着陸背景) 約3~4分

(3) 使い方

□ステーション(パーク)で専用端末(タッチスクリーン)を操作し、行きたい場所(駐車場またはホテル)を指定する。中央システムによってルートがプログラム設定されているので他のPodと位置関係を考慮した上で進む。

□Podの操縦は全てコンピューター制御によって行われ、操作はボタンを押すだけで全てが自動制御されている。

(4) Pod操作

①Pod前タッチパネルで行先選択(駐車場または駅) ⇒ ②Podドア自動開錠 ⇒

③Podに乗車(2人ずつ正対し4人) ⇒ ④ドアクローズボタン押下(自動閉鎖) 音声案内 ⇒

⑤スタートボタン押下(音声案内) ⇒ ⑥自動走行(車窓から空港景色) ⇒ ⑦駐車場パーク到着

⇒ ⑧ドアオープンブザー ⇒ ⑨自動開錠(音声案内) ⇒ ⑩Podから降車





4. 雑感

- ステーションでの指示操作や社内でのボタン操作も非常に簡単であり、大人から子供まで操作可能だと感じた。また、バリアフリー設計で乗り降りもスムーズにできた。
- 乗車時間も4～5分程度の短時間で約4kmの距離を専用レーンでスムーズに移動できる交通手段であり、ストレスフリーである。
- 専用レーンは高架になっており路面はアスファルトかコンクリート状で、その路面をゴムタイヤで走行している。走行だけのイメージはゴルフ場の電動自動カートがはるかに速いスピード走行している感じである。もちろん車内快適感は全く異なる。
- 往復とも車両がそれぞれの車帯（二車線）を相対して走行するのですれ違いもあるが、分岐点等でのすれ違いの際等は完全にコンピューター制御されており衝突することはなさそうだ。
- 車両色は白と黒ツートンカラーが基本で窓も大きく移動中の車内からは、空港の景観や飛行機の離発着も目の当たりに出来て搭乗前後の楽しみにもなる。
- 一部には「ラッピング車両」もあり広告効果も期待できるが、ラッピングカーは外景が観づらいのがデメリットである。
- 電気エンジン稼働でタイヤ走行なので静かでタイヤ走行音も殆ど聞こえず、室内温度も保たれ快適であった。（環境にもやさしくCO2削減につながる）
- 現在、駐車場が不足気味の「那覇空港」での活用イメージとしては、自衛隊エリアや瀬長島近隣に駐車場を整備して空港敷地周辺の柵沿いに専用軌道を施設し運行するイメージである。空港利用者の時間計画の安定化が図られると見込む。
- 導入時（2011年）は導入並びに運行費用について高額な点がデメリットとされていたが、体験搭乗してみると、施設設備も比較的軽微な感じがし、各種自動運転技術が発展してきている現在では技術面含めて難度の高い導入計画に当たる印象は受けなかった。
- 拠点（空港や港・バスターミナル等）から南部・中部・北部の結節点移動後の「ラストマイルへの活用」が期待されよう。

以上

参考：下記 Pod 動画資料

<https://www.bing.com/ck/a?!&&p=8ade7c19d521c6bc507110988e7c9373058de12dfaa9dc1062a709d4efb3b560JmltdHM9MTczMzYxNjAwMA&p=3&ver=2&hsh=4&fclid=2055d654-e98e-691c-3ad1-c240e8396806&u=a1L3ZpZGVvYy9yaXZlcjZpZXcvcmsYXRlZHZpZGVvP3E9JWUzJTgzJTkyJWUzJTgzJWJjJWUzJTgyJWI5JWUzJTgzJWFkZWUzJTgzJWJjJWU3JWE5JWJhJWU2JWI4JWFmUE9EJm1pZD1GNjQzRjA5ODdCQkZFQThEQThDMUY2NDNGMDk4N0JCRkVBOERBOEMxJkZPUk09VklsSRQ&ntb=1>

出典：London Heathrow Driverless Pods - Ride from Parking A to Terminal 5

YouTube On A Plane Again Travel 2023年11月8日より

XI. JETRO ミラノ事務所訪問

【報告者：仲里 武思（沖電開発株 代表取締役社長）】

本日のイベントスタートは JETRO ミラノ事務所とのミーティングである。前日のホテル到着が深夜 0 時となったこともあり、予定より遅れてのスタートとなったが、今朝も変わらず皆さん元気な様子、さすがです。

1. ブリーフィングの概要

はじめに JETRO ミラノ事務所長 三宅 悠有 氏のブリーフィングである。イタリア人からの日本の見方はまさに観光地であり、存在意義的なものを重視する「生きがい」とつながる場所ではないかと感じていること等から日本に対する関心は非常に高いとのこと。今回、実態を感じ取っていただくことで沖縄県の発展に繋がることを願う旨、冒頭のご挨拶をいただいた。

本題のイタリア経済・ビジネス概況説明の概要は次のとおり。

今でこそ統一されているが、隣同士の市と県が戦っていた歴史的経緯から地域や都市ごとに特徴を持つのがイタリア。人口や面積等は日本より小さいが、一人当たり GDP が日本を上回り逆転したのがシンボリックな指標となっている。

経済成長率は小幅なプラス成長に止まっており、足元の経済状況は低位安定で脆弱な状況が続いている。EU 復興基金で投資を回した結果 GDP 成長率が EU 平均を上回ったが、効果も薄れていることから来年以降は下回る見通し。総じて現時点では経済環境は上向きであるが、消費者動向や生産動向をみても景況感が大きく高まっていると認められる状況にはない。

産業構造としては製造業に強みを持っており、貿易関連ではコロナ禍の一瞬を除き過去最高額を更新するなど輸出入額ともに順調に拡大している。

一方、エネルギー安全保障等の観点から天然ガスを中心としたエネルギーのロシア依存からの脱却が課題となっている。原子力については国民投票により NG であるが、7 月に発表したエネルギー戦略において小型原子力導入に向けて検討開始したところであり、総需要の 11%を供給するシナリオを描く。エネルギー政策の課題は非 E T S 部門の温室効果ガス排出削減やエネルギー効率の向上、水素エネルギーの導入が挙げられるが、E U の目標が厳しいこと等から達成には不透明な要素が残る。

他にも直接投資動向、関心と印象などを通しての日本との関係性に関する興味深い報告があった。

次に、イタリア三菱商事社長の古賀英考氏からのブリーフィング。古賀氏が考えるイタリアの特徴として、①真面目で効率的（一般的イメージとは逆）、能力も高く仕事が早い、②創造性が豊かで地に足の着いた感がある一方、ドメスティックな面がある、③行政が海外企業に対して協力的でサポートが強いなど、実際的な事例も交えながらの説明で現地実態把握に大いに役立つ内容であった。

時間の制約上短時間となったが、お二人のブリーフィングは非常に有益な内容であり、G7 メンバーとして身近に感じているイタリアに対する従来のイメージを変える瞬間であった。

2. 質疑応答

Q. 講話の内容とは少しずれるが、沖縄は観光立県ですが、ヴェネツィアのオーバーツーリズムが世界的にニュースになっているが、今イタリアではどのような対策をとっているか。日本（観光立県である沖縄）もオーバーツーリズムが問題になっているのでお聞かせいただきたい。

A. 一番は、観光税を徴収すること。今年の春から、特定の日に宿泊を伴わない日帰りの観光客から入島税を徴収する取り組みを試験的に実施した。具体的な数字まではお答えできないが、非常に効果があったということが分かり、来年の夏からまた入島税を徴収することが決まった。このような取り組みにより、観光客自身の数をいわば制限するというのも一つの方法である。

その他に、一部の島では生態系が破壊されたことを受け、その場所自体への入域を制限して、生態系が回復するまでは観光客を入れないようにしているところもある。

Q. イタリアの人の性格として、創造性や効率性があるって時間内に終える能力があるということだが、その要因として日本とは教育のやり方が違うのか。日本では働き方改革と言われているが、イタリアはどうか。

A. 教育というよりも、そもそも残業をしないというのがベースにある。仕事とプライベートをきっちり分けるという国民性なのかもしれない。自分の健康や家族が第一であり、家族との時間をきちんと確保するために仕事を切り上げる。いわゆる人間が本来持っている素直な感情の中でそうなっている。

最後に、報告に関するディスカッションにおいてはオーバーツーリズム対策、業務処理能力と教育との関係性に関する質問への説明や沖縄観光へのヒントを得たこと、沖縄のエネルギー事情を再認識できた旨の沖縄側コメントがあり、中身の濃い内容で終了でした。



XII. アルベルゴ・ディフーズ（ゴルフェレンツォ村）ならびにワイナリー視察

～イタリアの街づくり成功事例、イタリアワインに見るブランディング戦略視察報告～

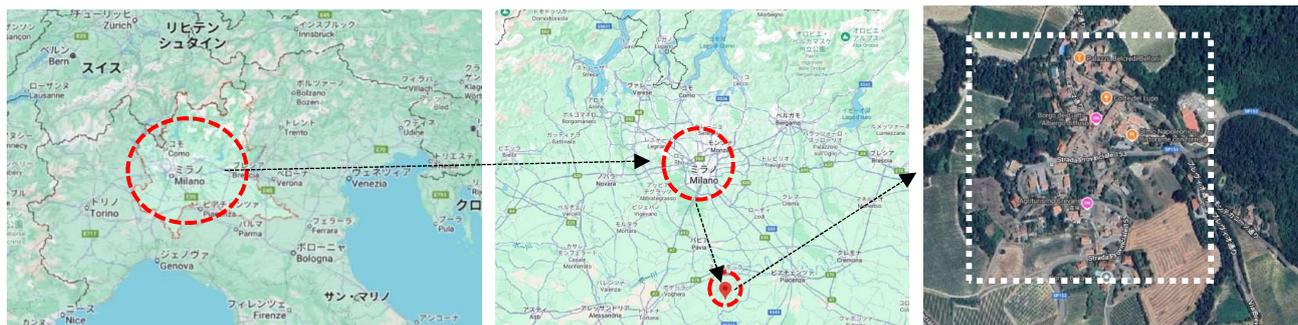
【報告者：河野辺 朋広（全日本空輸(株) 沖縄支店長）】

1. 視察日：2024年10月31日（木）

2. 視察①【イタリアの街づくり成功事例】～過疎からの転換。魅力的な街づくりに成功したゴルフェレンツォ村 アルベルゴ・ディフーズの取り組み～

(1) 場所

ゴルフェレンツォ村（Golferenzo）は、ミラノを州都とするロンバルディア州の南西部に所在するパヴィーア県にある自治体。ミラノ中心街より車で約80km/90分ほどの距離にある。イタリアでも「綺麗な村」に選ばれており、かの皇帝ナポレオンもセントヘレナ島に流される前に立ち寄った場所であり、木陰で休憩を取ったと言われる記念樹もある（＝オモ）。過疎化が進み村はほぼ廃村であったが（1ユーロで売られた旧家もあった）、後述のアルベルゴ・ディフーズの取り組みにて村内の建屋を有効活用し、活気を取り戻している。



<イタリア・ロンバルディア州の位置>

<ミラノとゴルフェレンツォ村の位置>

<空から見たゴルフェレンツォ村>

(2) アルベルゴ・ディフーズ (Albergo Diffuso/AD)とは？

イタリア語で「アルベルゴ」は「宿」、「ディフーズ」は「分散した」という意味で、直訳すると「分散した宿」となる。

イタリアで少子高齢化による過疎対策として、空き家問題を観光産業で解決しようとする取り組みで、集落内の空き家等をホテルに一室として活用し、中心にレセプション拠点を置き宿泊施設やレストラン等を村内に水平且つ一体的に広げ、建物単体ではなく地域一帯を丸ごとホテルとみなし、空き家問題の解決だけでなく宿泊者の地域内回遊による活性化や交流創出が期待されている。分散型宿泊施設として「地域まるごとホテル」とも言われる。中心拠点から概ね半径200m以内に施設が集積していることやひとつの経営体によって運営されていること、などの要件定義がある。

(3) 視察内容

ミラノ市内を昼前に出発。ドライバーのルイジさん運転のバスにて高速道路を經由し13:30頃に

村に到着。村内の中心にあるレストラン「Olmo Napoleonico Ristorante con forno a legna」の経営者であるパウロ MS より歓待を受け、懇親ランチをご一緒した後に併設する Spa 施設案内を頂いた。

- ・村には 9 棟計 32 名分の旧家を活用した宿泊施設あり（村の建物全部が宿泊施設ではない）。ひとりのオーナーが関係する建物をすべて管理。ちなみに村民の数は現在 8 名。
- ・お客様はフロント施設でチェックイン/チェックアウトする。指定された宿泊施設のカギの取受はここで言い、施設までは自ら移動する。
- ・レストラン施設が 2 ヶ所（前述のランチ会場含む）あり Spa もある（レストラン併設）。但し文化施設はない。
- ・料金は平準的には@160 ユーロぐらいとのことだが、季節変動がある（高い時は高い）。
- ・もともとは母親の療養のための地として過ごす予定だったが、長期に過ごすことになり相応の建物が必要となったが、新しく建てるには費用が高く旧家リノベーションを選択。しかしながら意外と過ごし良いことが分かり、当活動への参加・推進の動機となった。
- ・Spa は村内に 1 ヶ所。都心と同様な施設やメニューでサウナ施設も備える。滞在者にも人気がある。
- ・当地はブドウ畑が広がるワインの生産地であるため、ランチとともに供されるワインも味わい良く完成度が高かった。



<運転手のルイジさん>



<村遠景とブドウ畑①>



<村遠景とブドウ畑②>



<村から見るブドウ畑>



<中心に位置するレストラン>



<レストランのオーナー・パウロさんとの懇親ランチ>



<レストラン隣接の Spa>



<館内施設>



<館外の様子>



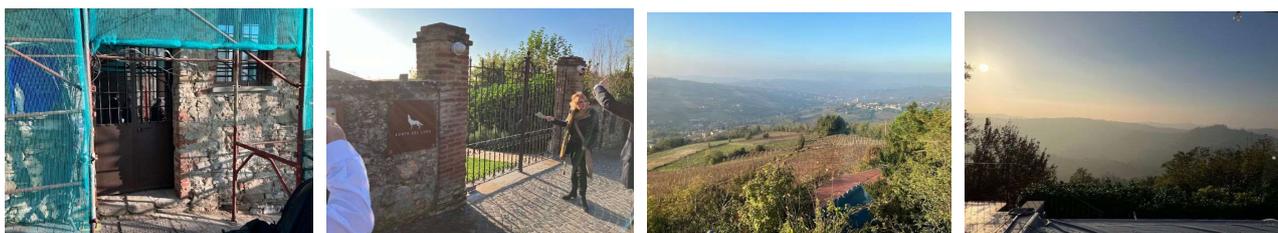
<サウナもあり>

ランチ後には村内を 30 分程度散策した。概ね中心から半径 200m 程の中が範囲であるため過度な徒歩距離ではない。山並み故に坂道もありまた石畳であるが歩きにくさはなく、逆に垣間見る山並

みの風景があるため散策の苦にはならなかった。施設として未使用の建物も多数あるが、朽ちた感ではないので景観上は気にはならず、むしろ欧州の片田舎の昔の街並み・風情をよりリアルに感じることのできる貴重な場所となっている。



<旧家の並ぶ街並みと石畳（宿泊施設でない建物も含む）>



<フロント施設入口(工事中)>

<もうひとつのレストラン>

<街中からの展望（午後、夕暮れ）>

散策の道中に、宿泊施設一か所を内覧。長い歴史のある建物を再利用した施設であるが、内装は設備やインテリアが十分に備わっており、外壁の管理もしっかり行われているため、風情と景観と共に静かに快適に自分の時間を過ごすことができる。



<キッチン>

<リビング>

<寝室①>

<寝室②>

<施設の前で記念写真>

上記をすべて終了した後に、再びバスに乗り込みワイナリーに移動した。

3.視察②【イタリアワインに見るブランディング戦略】～次世代経営者による販売戦略。土着品種の活用や有機農法へのこだわりなど。ワイナリー視察～

(1) 場所

ミラノ市内から約 80 km/90 分程度のところにあるバヴィア県内のブドウ畑のテリトリー内に在するワイナリー「カマトニー家 (Calatroni)」を訪問。先のゴルフフェレンツォ村からさほど遠くはないが、山並みを通るため約 1 時間程度の移動で到着が夕刻であった。

カマトニー家はバヴィア県内で 13,800ha を有しており、1960 年から祖父母が土地を借りてブドウ生産を開始している。その後 1965 年に土地を買い取り現在の経営に至っている。兄弟で経営しており、兄弟各々の持つ技術面と営業面の強みを活かしあいながら経営をしている。プレゼンテーションでは歴史や製法や想いを丁寧さと熱い情熱にて説明いただき、その重みを認識した。



<ミラノからの位置> <ワイナリー入口(工場正面)> <駐車場の案内板(トレッキング案内有)> <レセプション口>

(2) 視察内容

① プレゼンテーション

レセプション部屋に入り当地ワイン及び当ワイナリーの特徴・拘りの説明を頂いた。

- ・ブドウはピノ・ノワール（イタリア語でピノ・ネロ）種が主だがリースリング種もある。リースリング種は北のオーストリアから入ってきたもの。30haの畑にピノ・ノワールとリースリング半分ずつを有機栽培している。ちなみにブドウは諸要素（気候、土壌等）で味が変わるが、例えば当地は海拔350mだがフランスだと650mで栽培しているところもある（標高が高いと酸味や色がしっかりする）。
- ・ここではピノ・ノワール100%のスパマンテ（イタリア語でスパークリングワインのこと）を製造しており、イタリアでは100%スパマンテはここだけで年間約4,000本生産している
- ・作り方には、「シャルマン方式（ステンレスタンクからそのまま出す）」と「シャンパーニュ方式（メトロクラシコ：瓶に詰め替え糖分と酵母を加えて王冠栓で密閉し瓶内二次醗酵させる）」があるがここでは後者。
- ・この製造の際に生じた澱（おり）は瓶の口付近に集めて取り除くが、これは澱の部分を冷却し凍った部分を瓶内の気圧を利用し取り出す作業が主だが、このワイナリーでは澱をマイナス30℃まで凍結させ固める技術があり、これにてより上質なスパマンテを製造している。
- ・二次発酵は最低9ヶ月とも言われているが、このワイナリーではじっくり36～120ヶ月程度として深みをもたせている。
- ・試飲ではスパマンテ2種（ピノ・ノワールスパマンテでもブドウが海拔350mと650mで生産されたもの）を中心に製造ワイン数種類を試飲。時間が非常にタイトであったため、若干駆け足での試飲であったが、とりわけスパマンテでは風味・酸味の違いも感じられ、ブドウ由来での味の違いを学ぶことができた。

上記を終了した後に、バスに乗り込みミラノ市内に向かった。



<カマトニー家兄弟からの丁寧な説明>

<参加者でワイン嗜み（試飲）中>



<当主の挨拶>



<試飲用のワイン>



<余談：当主御母堂作製の絶品アテ>

4. 所感

- ・アルベルゴ・ディフーズは過疎地課題解決の発想から生まれたが、日本各地でも過疎地課題は存在している。過疎化は概ね「発生する廃屋廃墟が景観を損ね、居住/訪問のマインドを冷やし、一層人を遠ざける」負のスパイラルを生んでいるが、「人は減れども建屋は残る」ことの裏腹の「建屋を活かして人を増やす」発想に立つことも負のスパイラル良化の手法のひとつと改めて感じた。
- ・無論、住民・来訪者・自治体及び施設関係者の理解・共感がマストであり、共有できる地域特性（＝地域課題）に合致したコンセプト構築とそれに基づく統一イメージ作り、サービス提供、魅力作りが重要である。またアルベルゴ・ディフーズのような広域な関係者との密な連携が必要であることから、コンセプト実現を推進する中核組織も必要かと思料した。
- ・沖縄には琉球時代からの趣ある建屋は散在しているが、個々に古き建屋としての存在しており、観光素材として有効化はされていないと思料する。使われていない琉球旧建屋（遊休資産）は歴史・文化の実体験を提供できる空間であり、単に保存・公開する一辺倒では片手落ちでもある。観光立県としての旅行者への多様な滞在環境整備やプロモーションが潜在的顧客の掘り起こしにつながり、継続的な来訪・滞在目的にもなりえると思料しており、沖縄地域活性化のひとつのコンテンツになりえると思料する。
- ・カラトローニ家は地域伝統のスプマンテ製造にあたり、サプライチェーン全体に沿った持続可能性への高い意識と湧き出す情熱を持ちながら有機栽培でブドウを栽培しているが、このアグリ視点とワインを合わせたツーリズム活動（単なる味わう機会だけでない）を推進している。
- ・カラトローニ家を何世代にもわたってワインに結び付けてきた出会いや想いをその体験を語りながら案内しており、自信の製品の魅力発信はやはり情熱を持った夢やビジョンを持つ者こそできる、と改めて感じた。また伝統を持って作り続けること（＝生き残ること）には新たに攻めることだけでなく、良い意味での情熱と信念の下に守るべきものがあるものだ、認識することもできた。

以上

XIII. コモ湖視察

【報告者：船場 誠吾（株式会社近畿日本ツーリスト沖縄 代表取締役社長）】

○コモ湖とその周辺地域の魅力

イタリア・コモ湖を訪れ北部の高級リゾート視察を行いました。コモ湖はイタリア北部のロンバルディア州に位置する氷河湖で美しい自然環境と長い歴史があり富裕層に好まれるリゾート地として世界的に知られています。また湖の周辺にはスイスとの国境を接する魅力的な観光地が広がっています。列車で3時間の近距離にスイスの素晴らしい山岳リゾートがあります。氷河特急で有名なサンモリッツではスキーやハイキングなどの多彩なスポーツアクティビティが楽しめますし、ルガーノ湖ではカジノやショッピングなども堪能できます。ミラノの喧噪や過密から一転、コモの静かなリゾートはとても印象的でした。当日は晴天に恵まれコモリゾートを十分体験いただいた1日になったのではと感じております。今後ミラノ直行便の運航開始によりミラノ⇒フィレンツェ⇒ローマ等の一般的な南への周遊コースに加え、新たな観光資源として北イタリアリゾートへの日本人の訪問も増えていくのではと予想しています。



1. コモ湖の魅力

コモ湖は迫力ある自然美と静かな環境で多くの観光客を魅了するリゾート地です。湖の周囲には壮大なアルプスの山々が広がりその水面には豪華な別荘やヴィラが点在しています。特に春から秋にかけては、湖を巡るボートクルーズやハイキングが人気で四季折々の景色を楽しむことができます。湖周辺の町々特にコモ市、ベッラージョ、ヴァレンナ、トレメッツなどは古い街並みが残り歴史的な建物や美しい庭園が観光名所となっています。15世紀にコモで発展したコモシルクは今もイタリアブランドとして有名です。ミラノからわずか1時間（列車、車）、イタリアで一番に建設された高速道路がミラノ・コモ間であった事も納得する所です。

2. コモ湖周辺の魅力（スイス）

コモ湖からはスイスのルガーノやベリンツォーナ、メンドリジオなどスイス南部の観光地へのアクセスも非常に便利です。湖畔からは、スイスアルプスの壮大な景色を眺めることができ、特にルガーノ湖周辺は美しい山々と湖が織りなす風光明媚な景観を堪能できます。これらのスイス側の地域では、ショッピングやカジノなどを楽しむことができます。イタリアからスイスに広がる山岳エリアの魅力が古くは貴族の保養地としてまた近年、観光客に愛されてきた理由であると実感しました。

3. コモ湖の歴史と開発

コモ湖の歴史は古代ローマ時代にまで遡ります。ローマ人は湖畔に別荘を建て避暑地として利用していました。その後中世には交易の要所として栄え湖は経済的にも重要な役割を果たしました。特に16世紀から18世紀にかけて、コモ湖は貴族や上流階級の避暑地として知られるようになり、数多くの豪華なヴィラや庭園が建設されました。近代になって観光業が発展し、特に19世紀末から20世紀初頭には、ヨーロッパの上流社会の間で人気のリゾート地となりました。ミラノ在住のガイドの三浦さんによるとコモ湖周辺のリゾート開発は、自然環境と歴史的資産の保護を重要視しながら進められてきたとの事です。コモ市や地域の経済団体、観光協会の方針によりリゾート施設やホテルは豪華でありながら周囲の景観に溶け込むようなデザインが採用されており、建物の高さや景観に配慮した厳しい規制があります。またコモ湖周辺の町や村では、観光業が地元経済を支える重要な要素となっており、観光地としての魅力を高めるために、ボートクルーズ、ハイキング、シルク生産等の地域資源が積極的に活用されています。特にヴラ・デステは19世紀に高級ホテルとして転用され、現在では世界的に有名な憧れのラグジュアリーホテルとして有名です。

○コモ視察のハイライト・ヴィラ・デステでの昼食と庭園視察

今回のコモ湖視察の中でポイントになったのはヴィラ・デステでの昼食と庭園視察でした。ヴィラ・デステは16世紀に建設された歴史的な邸宅で、現在はラグジュアリーホテルとして知られています。その豪華な建築、洗練されたサービス、そして広大で美しい庭園は高級リゾートとしてのコモ湖の魅力を体感するには最適な場所でした。



1. ヴィラ・デステでの昼食

メインダイニングのベランダにて昼食を取りました。数多くのセレクションメニューの中から地産メニューの鱈をメインに、オントレーはカラスミと豆のパスタ、デザートは季節の味として旬の栗とチョコレートのデザートをご提供頂きました。また、ワインは赤白ともにメインとの相性を考え塩味のある軽めのをレストランソムリエからのおすすめで提供頂きました。地元の新鮮な食材を使った料理はイタリアの伝統的な味わいを大切にしつつ、現代的なアプローチが加えられており、セレブ達に愛されてきた伝統と洗練を感じる事ができました。レストランは湖畔に面しており、窓から見える湖と庭園の景色が美しくリラックスしたひとときの中でもコモ湖の壮麗さと歴史を参加者一同感じたのではと思います。

2. ヴィラ・デステの庭園視察

昼食後、ヴィラ・デステの広報担当の方のご案内で庭園視察とホテルインスペクションを実施しました。フロント前の豪華な生花、美しい絨毯と窓から見えるコモ湖の借景、心地よいホテルのスタッフの応対等々、リーディングホテルで世界一になった事を実感することのできるホテル視察となりました。庭園は広大な敷地に広がる多様な植物と噴水の調和が美しく、彫刻が所々に配置されており庭の景観を引き立てていました。庭園はルネサンス時代の設計を基盤に自然と人工物が一体となるようにデザインされているとホテル担当者から説明がありました。庭園内の高台からはコモ湖の全貌を一望することができ、散策時には湖面に映る対岸の景色がとても印象的でした。素晴らしい造形美から貴族の社交場であった歴史の重み、イタリア人の空間センスや職人気質を感じさせられました。

3. コモ湖視察で感じた事

コモ湖の観光開発は環境保護と持続可能な観光をコンセプトにてしています。周辺地域の自然環境を守るために観光インフラの整備においても様々な配慮がなされていました。特に湖の水質保全やゴミの管理また湖面に立つ建造物の制限や環境整備などには厳しい制限が設けられているとのお話を船長さんからお聞きしました。地元の商業施設やレストランは地元の食材や製品を積極的に取り入れ、観光業と地域経済を結びつけておりヴィラ・デステでの昼食も季節の食材と地産地消にこだわったものでした。

自然環境や文化遺産を活かした観光コンテンツの開発や、持続可能な観光を長期目線で取り組むことが沖縄観光においても欠かせません。ミラノの煩雑さとは別世界のコモリゾートの素晴らしさを体験し改めて環境を守り次世代につなげる事が沖縄の旅行業の重要な使命であると気づかされました。久しぶりに欧州を訪問し改めて自ら訪れ、自身の目で見て、感じる事が大切であると感じた視察となりました。

XIV. 在ミラノ総領事によるブリーフィングならびに意見交換会

【報告者：安慶田 晃大（沖縄電力㈱ 法人営業部長）】

2024年11月1日（金）夕刻に、在ミラノ総領事の小林敏明氏よりイタリアの観光業の現状とブランド戦略等についてご講話いただき、意見交換を行った。概要は以下のとおり。

【観光業の現状】

イタリアは世界有数の観光地であり、特に歴史的な都市、文化遺産、美しい自然景観で世界有数の観光大国となっている。主要観光地であるローマ、フィレンツェ、ヴェネツィアなどは依然として人気があるが、持続可能な観光の意識が高まる中、観光客は次第に人混みを避けるようになり、南イタリアや主要都市から離れた地方への関心も高まっている。

一方、過度のオーバーツーリズムが観光地の環境や住民生活に悪影響を与える問題も浮上しており、観光業の持続可能性が問題となっている。また、観光業の雇用面では、シーズンに依存する短期雇用が多く、観光業の従業員の労働環境や給与も議論の対象となっている。デジタル技術の導入が進む一方で、地域に根ざした文化や伝統を守るための観光資源管理が求められており、イタリアは観光業の成長と環境保護のバランスをとりながら進展を目指している。

1. イタリア観光振興戦略

イタリアの観光振興戦略2023－2027は、持続可能な観光と地方分散化を重視する方向にシフトしている。

まず、主要観光地の過密化を緩和するため、政府は観光客を全国に広げる取り組みを推進している。南イタリアや田舎地域の魅力を発信し、新たな観光資源の開発を進めることで、観光の恩恵が偏らず地域全体に広がることを目指している。

また、デジタル化も促進されており、観光情報のオンライン化や観光客がスムーズにアクセスできるプラットフォームの整備が進められている。

さらに、持続可能な観光を推進するため、グリーンツーリズムやエコツーリズムの導入が奨励され、観光業の環境負荷を軽減する取り組みも行われている。地域の文化や伝統を尊重しながら、観光地としての価値を高める「スロツーリズム」の概念も普及しつつあり、観光の質的向上に力が入れている。

観光業を国の重要な経済基盤として維持するため、公共交通の整備や地域間の連携も強化されており、イタリアは観光客の満足度向上と同時に、地域経済の活性化と持続可能な発展の実現を目指している。



2. ヴェネツィアの観光税

ヴェネツィアでは、観光客の増加による島内への影響を軽減するため、2024年4月25日から7月の一部まで、日帰り観光客に対する観光税を試験的に導入した。(ホテル等に宿泊する人は既に宿泊税が課税される制度となっていることから事前手続きを行うことで観光税の対象外)

対象日は観光客が最も多い週末や連休に設定され、8:30~16:00の間に訪れる観光客は一人あたり5ユーロの支払いが求められ、支払いは専用ウェブサイトから行い、QRコード形式のチケットを提示することで証明される。(宿泊者や住民、通勤・通学者などは対象外)

観光税導入の背景には、観光による過密問題や持続可能な都市環境の維持が挙げられる。具体的には、例えばヴェネツィアの遺産保全や観光環境の目的とする基金に充てるとされている。ヴェネツィア市長は、この試験的導入で効果が確認されたとして、2025年には支払額を10ユーロに倍増して改めて試験的な徴収を行う意向を表明した。

3. 観光客数等

イタリア国内の各種統計によると、2023年にイタリアを訪問した観光客数は歴代1位となっており、国家統計局によれば同年の外国人観光客数は5,725万人。イタリアを訪れる外国人は概ね、ドイツ、フランス、オーストリア、スイス、英国、スペイン、米国、オランダ、カナダ、オーストラリアの順に多く、日本に対する期待は大きい。また、国内では南部から北部に観光に来る人が多い。

ローマやヴェネツィア等の観光地は国内外の訪問者に人気があり、特に外国人観光客はヴェネツィアやフィレンツェ等に集中する傾向がある。また、訪問者数は地域ごとに異なり、特に北部のロンバルディア州やトスカーナ州が高い観光収益を上げている。

4. 観光情報のオンライン化

イタリアでは、観光情報のオンライン化が近年急速に進んでおり、全国的にデジタル・プラットフォームを通じた観光情報の提供が強化されている。

以前は、観光情報の多くが観光案内所や印刷されたパンフレット、ガイドブックを通じて提供されるのが主流で、観光地の公式ウェブサイトやオンラインでの情報提供は限定的であった。しかし、現在では政府と自治体が協力し、地域や都市の観光データを集約する観光プラットフォームが開発されている。

具体的な観光プラットフォームには、観光スポットや施設の予約・案内を一括して行うサイト、現地のイベント、歴史的・文化的施設の詳細情報、アクセス情報、混雑状況、チケット購入サービス等が統合されたデジタル・ツールが含まれる。

こうしたオンライン・プラットフォームの整備は、観光客が自分のペースで観光地の計画を立て、混雑を避けて訪問するなど、持続可能な観光を推進するための一助となっている。

【ブランド戦略 (ロンバルディア・スタイル)】

ロンバルディア州はイタリア経済の牽引役であり、同州が国家であれば欧州内第10位の規模を誇る。州のアイデンティティを高め、国際的な魅力を増進するためのブランド戦略の一環として、本年から「ロンバルディア・スタイル」を積極的に展開している。

「ロンバルディア・スタイル」は、地域資源の特性を最大限に活かし、文化、自然、ライフスタイル、

ワインと郷土料理、モード、手工芸に至るロンバルディア州の多岐にわたる魅力をブランディングするとともに、地域のアイデンティティを国際的に広めることにより、観光と産業の振興を推進するもの。

1. ブランド・コンセプト

- ロンバルディア州を「革新と伝統が共存する地域」として位置づけ、デザイン、ファッション、製造業、観光業等、多様な産業の結集を目指している。
- 地域の自然、文化、産業の各資源を組み合わせ、ロンバルディア独自のライフスタイルを国際市場に訴求。

2. 主要産業のブランディング

- ファッションとデザイン：ミラノを中心にファッション・デザイン分野での先進的なブランド力を強化。
- 食品・ワイン：農業やワイン製造もロンバルディアの強み。これをブランド戦略に組み込み、イタリア食文化の一翼を担う地域として訴求。
- 製造業とイノベーション：高品質な製造業の技術や革新性を前面に押し出し、特に工業やバイロテクノロジー分野での競争力を強化。

3. 観光振興

- 観光地や自然環境の豊かさをアピールし、特にアルプス地方の自然、ガルダ湖周辺のリゾート、ミラノの都市文化を組み合わせた観光誘致活動を展開。
- ロンバルディアの歴史的建造物や博物館など、文化的資源を活用した地域プロモーションも強化。

4. 国際展開とターゲット層

- 海外市場を意識し、特にファッションや高級消費財に関心のある層、および観光客をターゲットとしている。
- 国際展示会やフェアへの参加、デジタル・マーケティングを通じた情報発信に力を入れており、日本やアジア市場にも積極的にアプローチ。

5. ローカル・アイデンティティと住民参加

- ブランド戦略の策定にあたり、ロンバルディア州の住民や地域の事業者との協力を図り、地域社会全体での「ロンバルディア・スタイル」を共有する取組みを推進。
- 住民や企業が誇りを持てるブランド・アイデンティティを確立し、持続可能な地域経済の構築を目指している。

6. 持続可能性とイノベーション

- 持続可能な観光や製品開発に重点を置き、地域資源の保護と活用を両立させたブランド戦略を展開。イノベーションと伝統の調和をテーマに環境に配慮した製品やサービスを地域のブランド価値として強調。

【意見交換】

同友会：イタリアの方はスローツーリズム、ゆったり楽しむとの話があったが、2日間イタリアに滞在してそれを強く思っているところ。日本人はどちらかというと1980年代、働きバチみたいな感じであったが、働き方改革などで変わってきたと考えている。イタリアの方は休みの日に散歩して過ごすなどの話があったが、生活の中でイタリアの方の幸せ感というのはどこにあるか？

総領事：イタリア人は家族を非常に大事にしている。対話が大好きであり、生活上しゃべるだけでなく、公式の場でも雄弁に話すことは美德と考えている。例えばエレベーターに知らない人同士乗っても大抵話しかけるなど、全然知らない人でもしゃべるところがあり、人間関係が近い。家族間でも話すことが重要と考えている。

大学の試験でも筆記試験がほとんどなく、基本は口頭試験。本を読んでそれを頭の中で咀嚼して淀みなくしゃべる能力が若いころから求められるため、人と話すことが得意。ここが一つの特徴と考えている。

同友会：昨年、中国の一带一路構想から離脱して1年近くなるが、当初、なぜ構想に参加しようと思ったのか、そしてなぜ離脱を決めたのか、離脱の影響は？

総領事：中国は経済力が伸びていたので中国との経済関係をよくすることはイタリアの経済にも裨益すると考えていた。一带一路への参加でより関係を深めようと考えていた。

ところが、一带一路を結んでも特段変わらなかった。大きく変わらなかったのが離脱した。

離脱の影響として、もう少し数字を見ていかないといけないが、例えばイタリアに住んでいる中国人の数は変わっていない。経済関連でいうと貿易もそれほど変わっていないとみられ、そういう意味では離脱の影響はあまりないと考えている。

同友会：富裕層の誘客について、イタリアではある程度成功していると考えますが、観光立県沖縄では一人当たりの消費額が10万円前後であり、それを上げることが課題である。富裕層を誘客することに関して日本の足りないところなどがあれば、ご教授頂きたい。

総領事：富裕層が泊まるようなホテルや施設は外からはなかなか見えないのでわかりづらいが、特別な思いをすることができる施設が日本にはあまりないと聞いている。例えば、イタリアの高級ホテルには17世紀以来の時代時代のピアノが一部屋に1台ずつあるとか、部屋の壁も美術館にあるようなものが使われていたり、有名なピアニストがそのピアノや歴史に因んだ曲を演奏したり、お客さまに特別感を感じさせるような仕掛け・サービスなどがたくさんある。



【小林総領事のブリーフィングを終えて】

小林総領事から日本とイタリアにはいろいろな共通点があり、イタリアの方は日本が大好きとのお話があった。

2015年にミラノ万博が開催された際もイタリア館に次いで日本館が2番人気であり、入場するのに8時間待ちになることもあったとの事。当時は日本食がすごく人気でこれを機に日本食店が増えたそうだ。

また、40歳代半ばまでのイタリア人で知らない人はいないというほど、日本のアニメや漫画が人気で、それに触発されて日本語を勉強したり、日本の文化を研究する人が増えているとの事であった。

イタリアでは日本の文化に関連した行事も多く、日本のコスプレ大会もあるとの事で、実際、私たちもハロウィンの晩に地元の子供が「鬼滅の刃」の衣装を着てレストランにお菓子をもらいに來る姿を目撃した。

イタリアの方が食や文化などを通して日本に興味や好感を持っていただいている事に、とても嬉しく思うとともに、これからも日本に関心を持ち続けてもらうためには何が必要だろうかと考えさせられた。

観光関連においてもイタリアの観光情報はオンライン化が進んでおり、統一されたプラットフォームで州ごとの情報が整理され、とても見やすく観光客に好評であるとの話や富裕層向けの施設の構築やサービスの充実を図り、お客さまに特別感を感じていただく事などで富裕層の誘客にも成功しているとの話なども伺えた。

今回、小林総領事から頂いたイタリア人から見た日本の魅力や（日本と共通点の多い）イタリアの観光業の現状とブランド戦略などのお話は、日本または沖縄の今後の観光のあり方を考える上で、大変貴重な機会となりました。

【その他】

意見交換会後の夕食会では、近畿日本ツーリストさんの計らいにより、オペラを間近で鑑賞しながらの夕食となりました。

出演者はミラノ最高峰といわれるミラノスカラ座合唱団正団員でテノール歌手の眞塩直さん、眞塩直さんの奥様でピアノ奏者の眞塩南さん、オペラ歌手の朝來恭生さんで、フニクリフニクラ（イタリア民謡）、誰も寝てはならぬ（トゥーランドット）、涙そうそうなど、全5曲を披露していただきました。



眞塩南さん 眞塩直さん 朝來恭生さん

間近で聴く生のオペラはすごく迫力があり、その声量に圧倒されるとともに、素敵な声色にとっても感動し、会場では「ブラボー！」との歓声と拍手が鳴り響きました。

今回の海外視察の現地での最後の晩に心に残る最高の夕食会となりました。近畿日本ツーリストの船場様・木下様、素敵なサプライズを有難うございました。

以上